

# 史跡 植山古墳の調査 現地説明会資料

## 【植山古墳とは】

植山古墳は橿原市五条野町に所在します。2000・2001年に当教育委員会が行った発掘調査によって、詳細な姿が初めて明らかとなりました。2002年には国の史跡に指定されています。

古墳は丘陵の南斜面に築かれた長方形墳で、南側に入口を向ける2基の横穴式石室が設けられています。このような形式の古墳は「双室墳」「双室墓」と呼ばれています。

墳丘の規模は東西約40m、南北約30m。墳丘の主軸はほぼ南北方向です（北で約13度30分東へ振る）。墳丘表面に葺石や貼石は施されていません。墳丘の上部は古墳よりも後の時代に削平されてしまっています。

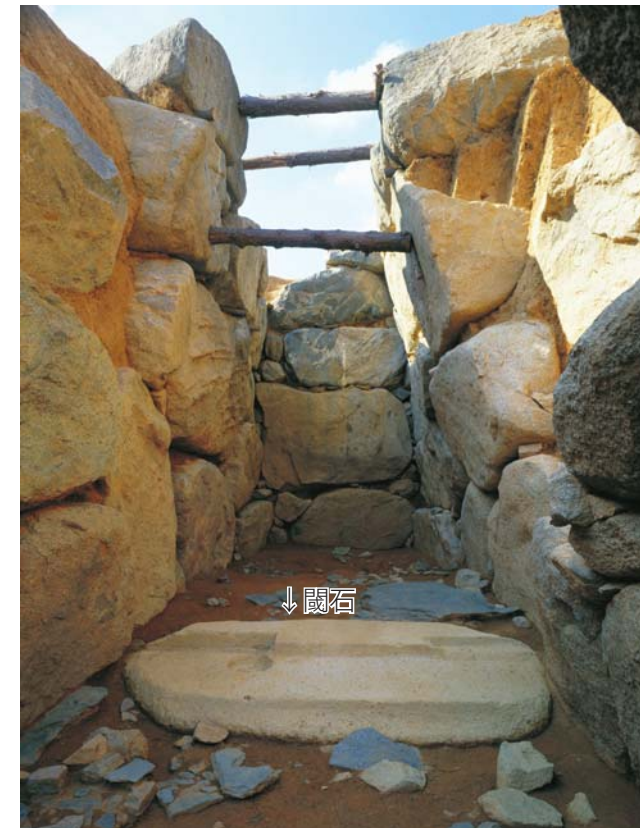
墳丘の西・北・東には『冂』字形に壕が巡ります。西～北の壕底には結晶片岩と花崗岩を用いた石敷きが施されています。

埋葬施設として2基の横穴式石室が東・西に並んでいます。東石室は古墳築造と同時の6世紀後半に、西石室はやや時を経た7世紀前半に築かれています。西石室は後から造り足されたものですが、墳丘自体は当初から横長に造られており、2基の石室を並べることはその段階から計画されていたようです。両石室の天井石と側壁の一部は、後の時代に持ち去られており、現在は残っていません。

東石室の規模は全長約13.0m、玄室長約6.5m、玄室幅約3.1m、羨道長約6.5m、羨道幅約1.9m、石室残存高最大約3.1m。床面には石組みの排水溝が構築されています。玄室には熊本県宇土半島産の阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇ピンク石）製の家形石棺が遺存しています。石棺の蓋は身から外され、割れた状態で発見されています。

西石室の規模は全長約13.0m、玄室長約5.2m、玄室幅約2.5m、羨道長約7.8m、羨道幅約2.2m、石室残存高最大約4.5m。羨道床面には石組みの排水溝が構築されています。玄室と羨道の境界部分（玄門部）には、兵庫県高砂市所在の揖保山周辺で産出する凝灰岩（竜山石）製の闕石が置かれています。闕石は石製の扉の底板であると考えられ、扉の軸受け穴と方立をはめ込む溝が掘られています。闕石は全長約2.5m、幅約1.3m、厚さ約0.5mを測ります。この扉材の一部と考えられる石材が、植山古墳の周辺に所在する春日神社・素盞鳴命神社・八咫鳥神社の境内に踏石の一部として転用されています。石室内に棺は残されていませんでした。

墳丘の背後（北側）の丘陵上には新・旧2時期の柱列が存在します。これらの柱列は墓の内外を隔て墓域を明示するための塀のような施設であったと考えられます。新しい時期の柱列は、古墳築造から約100年後の藤原京の時代頃に立てられたと考えられます。その間、植山古墳が特別な場所として維持管理され続けていたということになります。



西石室（玄室）



東石室



南東上空から見た植山古墳（2000年撮影。左下の破線内が今回の調査範囲）

## 【今回の調査の概要】

### □ 墳丘前面の調査

墳丘前面は、古墳よりも後の時代の土地改変によって削平を受けています。その結果、墳丘前部を輪切りにした土層断面が確認できる状態になっており、墳丘・石室の構築過程や石室の閉塞（出入りが出来ないよう閉じること）状況についての詳しい情報が得られました。なお、墳丘裾の正確な位置や、外部から石室に入る通路（墓道）については削平されてしまっており、確認できていません。

**石室・墳丘前面の閉塞土** 東・西の石室の入口が盛土によって閉塞されていることを確認しています。とくに東石室では、閉塞土が石室入口（羨門部）から墳丘前面東側にかけての非常に広い範囲を覆っており、閉塞後は外部から石室入口が完全に見えなくなっています。東の閉塞土の範囲は高さ約4m・奥行（南北）約4m・幅（東西）約10mに及びます。東石室の閉塞土が施された時期は、西石室構築（7世紀前半）以後です。東石室では閉塞土をU字状に掘り込む通路状遺構も存在しますが、詳細な時期と用途は不明です。西石室の閉塞土は、後世に石室石材を取り去った際に大部分が削られてしまっていますが、東石室と同様に石室入口を覆い尽くすように盛られていたようです。西石室の閉塞土は二段階に分かれ、古い段階の閉塞土（西石室閉塞土①）は東石室閉塞土より先に盛られています。

**古墳築造の方法** 植山古墳は丘陵の南側斜面を削り出し、その上に盛土を施して築かれています。墳丘前面では、その詳細な工程が確認できます（下写真参照）。各工程はそれぞれ東西方向に水平な面を意識的に形成しながら進められています。墳丘南西隅（写真より西側）では、地山（古墳が造られる前の地面）を大きく掘り込んで西側の壕を造り出している様子も確認できます。

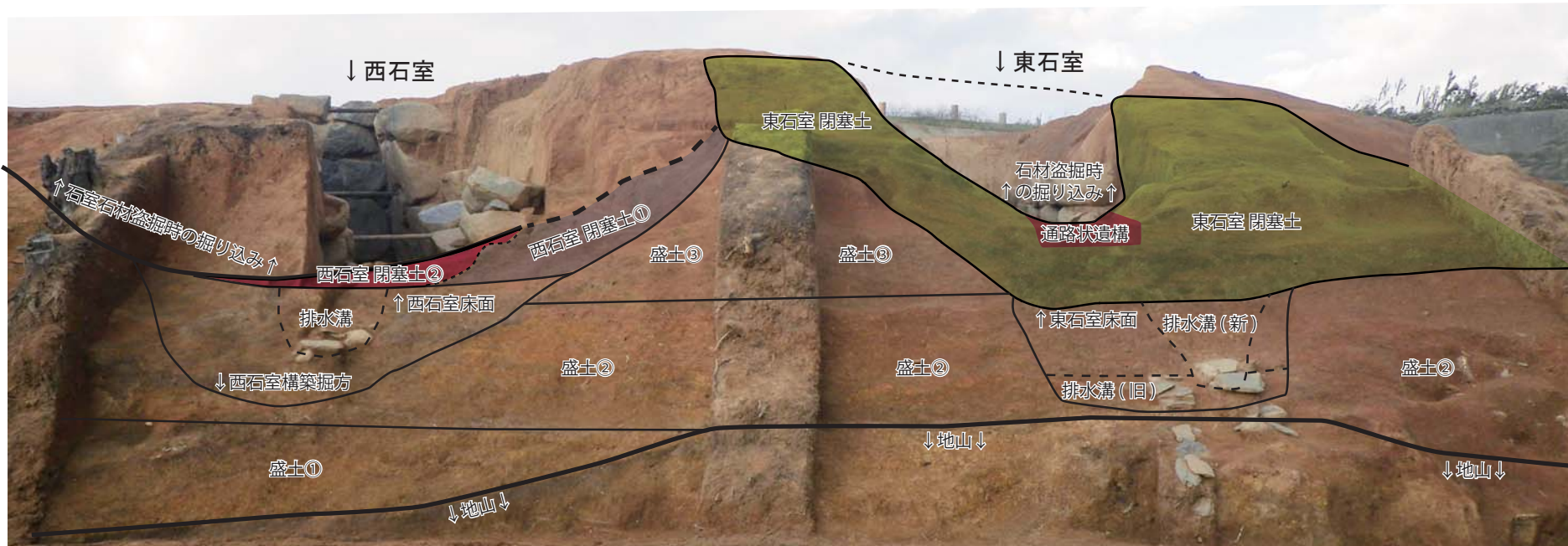
**石室排水溝** 両石室ともに石組みの排水溝が構築されており、墳丘前面でその延長部分を検出しています。排水溝は少なくとも石室入口（羨門部）より南では地下に埋設する暗渠構造になっています。また、東石室では排水溝が新しく造り替えられている様子も確認できます。

### □ 墳丘の南に広がる平坦地の調査（平坦地の範囲は南北約35m・東西約30m）

**古墳に伴う整地層** 平坦地の北東端と南東端において地山（岩盤）を検出しています。古墳築造以前はこの谷を盛土によって埋め立てて整地を行い、墳丘の前に広い空間を造り出しています。整地層の厚さ（深さ）は最大で約2mに及びます。後世に削られてしまった部分もありますが、整地の範囲は平坦地のほぼ全面に及んでいます。整地層内からは少量ながら石室内の石棺と同じ阿蘇溶結凝灰岩（ピンク石）の薄片が出土しています。整地層の上面は平坦地南半では南・西方向に低くなる斜面を形成しており、整地層上面のもっとも低い地点と墳丘頂上とでは約13mもの比高差があります。

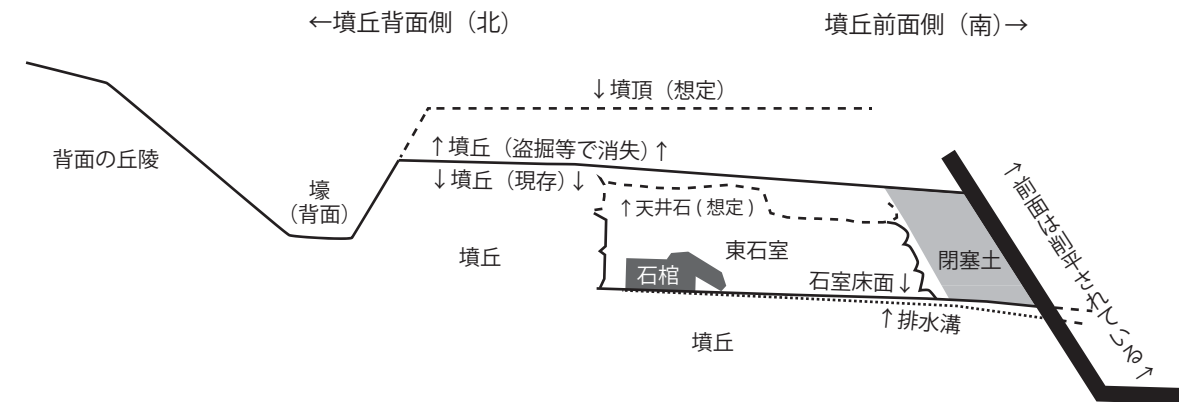
### □ まとめ

今回の調査では、広範囲に盛土（閉塞土）を施して石室入口周辺を覆い尽くすという特異な閉塞方法を採用していることが明らかになりました。背面の丘陵に建てられた柱列と同様に、埋葬から時期を経た段階においても古墳の管理がなされ続けていることを示しており、植山古墳の特殊性がさらに浮き彫りになったと言えます。また、墳丘の築造過程や古墳前面の整地についての詳しい状況が明らかになりました。墳丘の築造と前面の整地はいずれも古墳築造以前の地形を大幅に改変する大土木工事です。植山古墳の築造に費やされた労力の大きさをうかがい知る事ができます。



構築順：(地山)→盛土①→盛土②→盛土③→東石室→石室天井石より上の盛土（現在は流失）→西石室→石室閉塞土

墳丘前面中央の土層断面写真



墳丘縦断面模式図（東石室中軸より東の見通し図）



調査地平面図（S=1/500。網掛部分が今回の調査範囲）